

2022 年度
部局自己点検・評価報告書
(評価対象年度：2021 年度)

【HP 掲載用】

新潟薬科大学
応用生命科学部
大学院応用生命科学研究科

目 次

1. まえがき

2. 応用生命科学部 自己点検・評価

I. 教育活動について

I-1. 学生の受入れについて

(1) 広報活動について

(2) 入学者選抜・入学試験結果について

(3) 新入学生の状況について

I-2. 学習成果について

(1) 教育課程の編成・実施について

(2) 学修成果について

(3) 授業運営について

I-3. 学生支援活動、キャリア支援活動について（学部、研究科共通）

(1) 学生修学・生活支援について

(2) キャリア支援について

I-4. AP、CP、DP、3方針の整合性について

II. 研究活動について（学部、研究科共通）

III. 社会連携・社会貢献活動について（学部、研究科共通）

III-1. 国際交流について

III-2. 高大連携について

III-3. 地域連携について

IV. 教員・教員組織について

IV-1. 教員組織について

IV-2. FD 活動について

V. 定員・学費の適切性について

3. 大学院応用生命科学研究科 自己点検・評価

I. 教育活動について

I-1. 学生の受入れについて

I-2. 教育課程、学修成果、授業運営について

I-3. AP、CP、DP、3方針の整合性について

II. 教員・教員組織について

III. 定員・学費の適切性について

4. 評定について

1. まえがき

大学は入学志願者数の継続的減少という厳しい経営環境の中、多様な価値観・能力を持って入学してくる学生に対し、各個性に適した教育を展開するため、自己点検・評価により教育組織、教育課程及び教育方法を改革・改善していく必要がある。本報告書は、2021年度の1年間にわたる新潟薬科大学応用生命科学部及び新潟薬科大学大学院応用生命科学研究科の自己点検・評価報告書である。2021年度は、2020年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の収束の兆しが見えないため、学内入構制限、遠隔授業の高度活用、三密防止対策、コロナ禍での学生支援など、ウィズコロナにおける大学及び大学院教育が一気に本格化した年であった。そのような状況の中でも1年次学生にとっては新たに策定された3つのポリシーに基づき教育を実施した年でもあった。

学生募集は、2020年度に引き続き、オンラインでの大学情報伝達、新型コロナウイルス感染症対策の中でのオープンキャンパス開催など難しい広報活動が続き、学生募集が困難を極めた。今後、応用生命科学部の素晴らしさを高校生に正確にしっかり伝えることができるように、本学部に適した「広報戦略」の策定が重要となると考えられる。

2021年度は、授業の内容にあわせ、質の高い教育を実施するために面接授業と遠隔授業の両方の活用が進んだ年でもあった。ディプロマポリシールーブリック表における評価では、平均がそれぞれの必要な能力獲得の条件を満たしているレベルに到達しており、新型コロナウイルス感染症の影響を受けつつもカリキュラムポリシーに沿った教育が実施できたと考えられる。

新型コロナウイルス感染症による制限がある中で難しい学生支援、キャリア支援が続いているが、例えば、学内合同企業説明会においては、新型コロナウイルス感染症の状況に応じ、対面からオンラインへの変更など迅速な対応を取り実施するなどの継続的な支援活動が5年連続就職率100%の成果へと繋がっていると考えられ、支援活動の継続が期待される。

研究活動については、新型コロナウイルス感染症対策の中でオンライン化を含めた多様な発表形態が模索される中、各教員の専門分野における積極的な活動が見られた。しかしながら、教員による研究業績の偏りが見受けられることは、今後の課題となる。

社会連携・社会貢献活動については、新型コロナウイルス感染症の影響で計画が実施できないことなどが多く、2020年度に引き続き、活動が難しかった。2022年度の状況にもよるが徐々にウィズコロナにおける新たな活動が期待される。

このような状況の中、2021年度の応用生命科学部及び大学院応用生命科学研究科の現状について自己点検・評価を実施し、さらなる改革への改善事項等を見出し、本学部、研究科の発展に向け、新たなPDCAサイクルの起点として本学局自己点検・評価報告書を活用していきたいと考えている。

2022年12月23日

応用生命科学部長、研究科長
質保証推進委員長、研究科質保証推進委員長
高久 洋暁

2. 応用生命科学部 自己点検・評価

3. 大学院応用生命科学研究科 自己点検・評価

応用生命科学部及び大学院応用生命科学研究科における、部局自己点検・評価報告書（対象年度：2021年度）の概要は次の通りである。

I. 教育活動について

I-1. 学生の受入れについて

- 応用生命科学科：2022年度入試と比較し一般選抜入試受験者（大学入学共通テスト利用方式を含む）が減少
- 生命産業創造学科：2022年度入試と比較し専願入試受験者が減少
- 2022年度入試と比較し、新潟県内大学等志願者が減少
- 大学等進学状況調査において、新潟県内県外大学等志願者が前年度より大きく減少したことによる本学部受験者数減少への影響
- オープンキャンパスの参加者数は増加した。オープンキャンパスを経由した出願率は低下したことから、オープンキャンパスの中身の強化の必要性

課題：定員充足

対策：全学・応用生命科学科・生命産業創造学科の広報戦略設計、入試科目・入試日程の検討、高大連携の改善に向けた検討

広報内容（応用生命科学部の魅力）、学生支援（ウイズコロナ対応）、キャリア支援（就職率100%維持）の維持または改善に向けた検討

- ◇ 学校推薦型選抜試験指定校制による入学者増
- ◇ 「応用生命科学科」：セールスポイント構築（新潟県内高校訪問による高校教員との関係性の構築、受験実績のある新潟県外高校への訪問）
- ◇ 「生命産業創造学科」：新潟県内向け広報の強化、新潟県内他大学文系進学者へのアプローチ

I-2. 学習成果について

- 入学学生の苦手領域抽出（プレイスメントテスト、到達度テスト）→授業反映
- 1年次から2年次への進級率が一番低い→ホームルームなどで友人関係構築の促進
- 卒業時アンケート→非常に満足、ある程度満足（応用生命科学科 77.4%、生命産業創造学科 78.5%）
- 遠隔でも面接と同様の高い授業評価を獲得

→遠隔授業に対する教員の工夫の成果

→面接授業を基本とし、遠隔授業で培ったスキルを駆使した質の高い授業構築に繋げる

- CP（カリキュラムポリシー）に基づいた教育活動の実施ができていることを確認

課題：留年率、退学率低下

対策：出席システムの導入→ドロップアウト防止への活用、学習サポート、フレッシュャーズセミナーによる入学当初からの友人関係構築、ウィズコロナ状況におけるアドバイザー活動再開による学生フォロー

I-3. 学生支援活動、キャリア支援活動について

- 新型コロナウイルス感染症の影響がある中、寄り添った学生対応や保護者説明会のWEB化等、可能な限りの対応を行ったことを確認
- キャリアガイダンス等、各種就職支援を継続していること、就職内定率は2017年度以降100%を維持していることを確認

I-4. AP、CP、DP、3方針の整合性について

- 応用生命科学部（応用生命科学科、生命産業創造学科）、応用生命科学研究科ともに3ポリシーの整合性が取れていることを確認
→ただし、生命産業創造学科のAPのみ一部検討の必要性あり
- ディプロマポリシールーブリック表を利用した評価で、教員による客観的な評価の平均は4段階評価の3であり、学生が必要な能力を身につけていると判断
→ただし、学生自己評価と教員の客観的評価のギャップがある項目が課題
- 新ディプロマポリシー（第1期）の達成度評価の実施

II. 研究活動について

- 新型コロナウイルス感染症の影響でオンライン化を含めた多様な研究発表形態が模索される中、各教員の専門分野における積極的な研究活動

課題：業績が一部の教員に偏る

→各教員で教育と研究のウエイトが異なるが、実験系教員は、実験場所、実験研究費の享受がある観点からも研究力向上に努め、卒業研究指導力及び応用生命科学部の魅力向上に繋げる必要性

Ⅲ. 社会連携・社会貢献活動について

- 新型コロナウイルス感染症の影響がある中でも、工夫をして新津商工会議所、田上町との連携をはじめとした積極的な活動を継続実施
- 新型コロナウイルス感染症の影響を考慮しながら国際交流を実施し、国際交流が学生の豊かな経験、並びに、教員と学生の研究力向上に繋がるように学部としてサポート

Ⅳ. 教員・教員組織について

- 学士課程専任教員数、授業科目への適切な教員の配置、教員の募集、採用、昇任等においては、適切に構成、配置、実施ができています

課題：女性教員比率の低さと年齢層の偏り

対策：まずは教育に空白を与えないような人事と現在の教員数でできる教育の考案

Ⅴ. 定員・学費の適切性について

- 学部定員充足率が低下しているため、充足に向けた改革の必要性
- 学部学費についての適切性は確認されたが、大学院学費は非常に安価

【定員について】

課題：定員充足率が100%未満

対策：生命産業創造学科の定員を60名から45名に変更（2023年度入試から）

課題：大学院定員の充足率の維持

対策：学部生に対して、初年次から大学院の魅力等を周知

【学費について】

課題：学部の学費は全国平均だが、大学院学費は非常に安価

対策：大学院学費の改定

4. 評定について

I. 評定の基準

2021年度の各項目における評定は、以下のSからCの4段階評定とした。

S	卓越した成果があがっている、または特筆すべき取組みを行っている。
A	成果があがっている、または近く確実な成果が見込まれる、もしくは適切な取組みがなされている。
B	十分な成果があがっていない、または取組みが不十分である。
C	全く成果があがっていない、または取組みがなされていない。

II. 評定一覧

応用生命科学部 自己点検・評価

項目名	評定
I. 教育活動について	
I-1. 学生の受入れについて	
(1) 広報活動について	B
(2) 入学者選抜・入学試験結果について	B
(3) 新入学生の状況について	A
I-2. 学習成果について	
(1) 教育課程の編成・実施について	A
(2) 学修成果について	A
(3) 授業運営について	A
I-3. 学生支援活動、キャリア支援活動について（学部、研究科共通）	
(1) 学生修学・生活支援について	A
(2) キャリア支援について	S
I-4. AP、CP、DP、3方針の整合性について	A
II. 研究活動について（学部、研究科共通）	A
III. 社会連携・社会貢献活動について（学部、研究科共通）	
III-1. 国際交流について	B
III-2. 高大連携について	A
III-3. 地域連携について	S
IV. 教員・教員組織について	
IV-1. 教員組織について	B
IV-2. FD活動について	B
V. 定員・学費の適切性について	B

大学院応用生命科学研究科 自己点検・評価

項目名	評定
I. 教育活動について	
I-1. 学生の受入れについて	A
I-2. 教育課程、学修成果、授業運営について	A
I-3. AP、CP、DP、3方針の整合性について	A
II. 教員・教員組織について	B
III. 定員・学費の適切性について	B